



ポートステータスと接続の確認

- ・タイムドメイン反射率計を使用したケーブルステータスの確認 (1 ページ)
- ・ポートステータスと接続の確認の機能履歴 (2 ページ)

タイムドメイン反射率計を使用したケーブルステータスの確認

タイムドメイン反射率計 (TDR) 機能を使用すると、障害発生時にケーブルが OPEN か SHORT かを判断できます。

TDR テストの実行

TDR テストを開始するには、次の作業を行います。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	<code>test cable-diagnostics tdr {interface {interface-number}}</code>	TDR テストを開始します。
ステップ 2	<code>show cable-diagnostics tdr {interface interface-number}</code>	TDR テストのカウンタ情報を表示します。

TDR に関する注意事項

TDR を使用する場合は、次の注意事項が適用されます。

- ・TDR テストの実行中はポート設定を変更しないでください。
- ・TDR テストを実行中のポートと Auto-MDIX が有効になっているポートを接続した場合、この TDR 結果は無効となる可能性があります。

- TDR テストを実行中のポートとデバイス上のポートなど 100BASE-T ポートを接続する場合、未使用のペア（4～5 と 7～8）はリモートエンドで終端処理されないため、障害として報告されます。
- ケーブルの特性から、正確な結果を入手するには TDR テストを複数回行う必要があります。
- 結果が不正確となる可能性があるため、（近端または遠端のケーブルを取り外すなど）ポートステータスを変更しないでください。
- TDR は、テストケーブルをリモートポートから外している場合に正しく動作します。それ以外の場合は、正確な結果が得られない可能性があります。
- TDR は 4 本の導線を対象とします。ケーブルの状態によっては、1 組の導線ペアのステータスが OPEN または SHORT と表示され、他のすべてのペアのステータスが **faulty** と表示される場合があります。この動作は、1 組の導線ペアが OPEN または SHORT であればケーブル不良と宣言する必要があるため、許容範囲です。
- TDR の目的は、不良ケーブルを特定することではなく、ケーブルがどのように不適切な機能をしているかを確認することです。
- TDR でケーブル不良が検出された場合でも、オフラインケーブル診断ツールを使用して、より詳しく問題を診断する必要があります。

ポートステータスと接続の確認の機能履歴

次の表に、このモジュールで説明する機能のリリースおよび関連情報を示します。

これらの機能は、特に明記されていない限り、導入されたリリース以降のすべてのリリースで使用できます。

リリース	機能	機能情報
Cisco IOS XE Gibraltar 16.12.1	タイムドメイン反射率計（TDR）	TDR を使用すると、障害が発生した場合にケーブルが OPEN か SHORT かを判断できます。

Cisco Feature Navigator を使用すると、プラットフォームおよびソフトウェアイメージのサポート情報を検索できます。Cisco Feature Navigator には、<http://www.cisco.com/go/cfn> からアクセスします。